

VI 仮説の検証

教師が意図したグループ編成の工夫をする中で、忍者ショーに向けた活動に取り組んでいく。そのことにより、幼児が多様な感情体験を多く経験することに繋がり、時には葛藤やつまずきをも経験し、思いやりの気持ちが次第に芽生えていくであろう。

1 検証前のクラスの様子、抽出児A、抽出児Bの実態について

本研究では、研究テーマに沿った保育実践を行い、幼児の姿やその変容から検証を行う。その対象を「クラス全体」と、「グループ」また特定の幼児2名の姿をもとに検証を行う。特定の幼児を「抽出児A」と「抽出児B」とする。

検証前の様子	
クラス全体の様子	実態としては、好きな遊びを見つけて遊ぶ子は多いが、一人遊びや単発的な遊びも多く見られる。自己主張のぶつかり合いによるトラブルや、反対に主張出来ずに泣いてしまう子など、自分達で相談したり、解決したりしながら遊びや生活を進めていくことが難しいという課題がみられる。
抽出児Aの実態	進級当初は、年長になったという嬉しさを感じており、すぐに年中の頃からの友達と遊びだしていた。クラスの中でも色々な活動に興味があり、活発である。自己主張が強く、自分の意見がいつも正しい、自分の意見が通らないと気が済まないようなところが強い。友達とそれが原因で言い合いになるなどのトラブルが多い。
〈教師の願い〉	友達の話にも耳を傾ける思いやりの気持ちを持ち、時には友達に譲ったり友達の意見を受け入れられるようになってほしい。A児と同じように自己主張の強いメンバーの中で、自分の思いが通らない経験を通してつまずきや葛藤の中から思いやりの心が芽生えてほしい。
抽出児Bの実態	入園前は集団経験はあるものの、遊びや活動への興味、関心が低く「やりたくない」という言葉が多い。2学期は、特定の友達はまだいないものの、自分の好きな遊びをする中で友達と触れあう機会が増えている。しかし、思い通りにならないとすぐ怒ったり、すねたりし、それが原因で活動に入らなかったりする。
〈教師の願い〉	自分の言動や行動が相手をどのような気持ちにさせてしまうか考えられるようになってほしい。また遊びや活動への興味、関心を高め、友達と協力したり相談したりしながら、楽しく参加するようになってほしい。B児は少しずつ友達と関わろうとするようになってきたため、B児を温かく受け入れながらも、対等に意見を言うことができるメンバーの中で成長してほしい。

2 教師の意図したグループ編成の工夫

- ①仲間が見えやすいように4人から5人とする。 ③グループの仲間関係を考慮し編成する。
 ②男児と女児の人数も偏りがないようにする。

サンタグループ(抽出児A含む)	まつぼっくりグループ	ばらグループ(抽出児B含む)
☆男児2名 女児2名 ☆主張の強い子を集め、その中で折り合いもつけられるようになってほしい。	☆男児2名 女児2名 ☆主張の強い子を多く集め、折り合いもつけられるようになってほしい。	☆男児2名 女児3名 ☆比較のおとなしい5人を集め、良いバランスの中で互いに補い合えそう。
よつばのクローバー	プレゼントグループ	となかいグループ
☆男児2名 女児3名 ☆女児が男児を優しくリードしながら協力し合えそう。	☆男児1名 女児3名 ☆女児が男児を優しくリードしながら協力し合えそう。	☆男児2名 女児2名 ☆特別支援児が安心できるメンバーで、グループとしても協力し合えそう。

クラス全体，抽出児Aを含むサンタグループ，抽出児Bを含むばらグループに着目し検証していく。
12月4日（検証場面①）

新しいグループの名前を決めよう

（背景）子ども達にくじ（教師の意図したグループになるくじ）を引いてもらい，楽しい雰囲気の中で新しいグループを作れるようにする。その後グループでお手玉の修行と題して触れあい遊びをし，楽しんでいけるようにした。最後にグループの名前を相談して決めることを提案した。

クラス全体新しいグループのメンバーにわくわくしており，楽しんで触れあい遊びをしている様子が見られた。名前を相談する場面でサンタグループを含む3チームは何とか自分達で決めることが出来たが，ばらグループを含む3チームは意見の違いからその日で決めることが出来ず，次の日まで持ち越された。

サンタグループグループの意見としてクリスマスにちなんだ名前が多く，A児も積極的に発言していた。この日は比較的大きなトラブルになることはなく，その日のうちに名前が決まった。

ばらグループB児は自分の提案した名前になかなか決まらないことに腹を立てていた。「もういいよ！」「やらない！」と不機嫌な顔をして怒っている。その様子を見て周りのメンバーも困惑し，お互いに目を合わせている。教師は仲介しようかと迷ったが，メンバーがこの問題をどう解決していこうとするのか明日まで見守ってみることにした。



図2 忍者の技揭示



図3 忍者の修行環境構成

考察

A児は自分と同じように活発に意見を言うメンバーの中で，少し困惑しているようだった。いつもなら言い返しそうなところを周りのメンバーの勢いに押されて言えないような様子もみられた。最終的に「サンタ」という名前にグループの意見がまとまり，A児も納得していた。A児もこの日はグループの様子を伺っていることや，自分の気持ちに折り合いをつけていたと考える。

B児は自分の思い通りにならないと怒ったり，すねたりするなど自分本位な行動がみられた。またその行動に周りのメンバーがどういう気持ちになるのかを考えたり，感じたりすることが出来ていないと考えられる。

12月5日・6日（検証場面②）

グループで見せたい技を考えよう

（背景）前日，名前が決まらなかったグループの様子を見守りつつ，先に決まった3グループにはグループで見せたい技を考えていくという課題を提案することにした。ホールの広い場所を使用し，グループで忍者の修行に色々と挑戦しながら考えられるよう，環境を用意しながら1時間程度の時間をとることにした。

クラス全体グループとして共通の課題を考えていく中で，それぞれの意見はでてくるが，一つに絞っていく方法を知らず止まってしまうグループや，「ジャンケンをしよう！」と提案がでて，4人でジャンケンをすると誰が勝ったのか，よく理解出来なくなったり，グループ内で友達とおしゃべりをして話し合いへの関心が薄れていってしまうなど様々であった。その際，教師がそれぞれのグループを歩いて周り，必要に応じて仲介したり，援助していくことで，少しずつでは



図4 クラスの話し合いの様子

あるが、グループとしての意見がまとまっていった。

サンタグループ A児は「こまをやってもいいんだよ！」「いんちきじゃないよ！」と初めは声を荒げながら意見を言っていた。その意見にメンバーが「自分達はこまやりたくないし！」「なんでA児だけやるわけ？」と勢いよく反論している。教師は子ども達の解決方法を見守りたいと思ひ様子を見ていた。しばらくして、グループのメンバーの一人が教師を呼びにきており行ってみると、A児が泣いていた。理由を聞くとA児は、「前に先生がやってみないと分からないから(新しい技のこと)、やってみていいんだよって言っていたからやろうとしたのに...皆が駄目って。」と泣きながら話しをしてくれた。教師はメンバーの皆に「A児は先生の話覚えていて、一人でもこまに挑戦してみたいんだって。先生も挑戦する気持ちは大事だと思うよ。皆はA児のことを応援することは難しいのかな？応援してもらったらきっとA児も嬉しいし、頑張れると思うんだけど...」A児は教師の話頷きながら聞いており、メンバーも真剣な表情で考えている。メンバーの一人が「応援していいよ」と言ってくれ、続いて他のメンバーも頷いてくれた。教師はグループの皆に「今度、グループの中でこういうことがあったら応援できるといいね」と声をかけた。

ばらグループ 前日の続きとして、なかなか決まらなかったグループの名前を決めるところから話し合いをした。初めは顔をお互いにちらっと見るが、すぐに目をそらしたり、他のグループの話し合いの様子を見ている子もいた。しばらく沈黙が続いたが、一人、また一人と名前を提案しはじめた。B児は自分の考える「ばら」というグループの名前をこの日も主張していたが、前日同様、一歩も譲る気配はなく自分の意見を言った後はそっぽを向き、他のメンバーの意見を聞く気は無さそうだった。

教師は、B児に「意見を言った後は、ばらという名前がいいのか一人一人の顔を見て聞いてみたらどうかな？」と提案してみた。B児は少し考えて、「ばらでいい？」と一人一人に確認するようになった。他のメンバーはB児に改めて訊かれ、しばらく考えて「ばらでいいよ。」と言ってくれた。最後は皆で顔を見合わせながら「じゃあばらね！先生、決まったー！」と元気な声で教えてくれた。

次にグループは大縄を皆で挑戦しよう決まり、練習が始まった。しかしB児は、練習が始まるとすぐに「この赤い縄跳びで練習したい！」と自分の意見を主張し、意見が通らないと分かるとすぐに怒った顔でその場から離れていった。周りは困って教師を呼びにきた為、B児に声をかけようかと迷ったが、この日はこれ以上仲介することはやめることにした。グループのメンバーに「B児も一緒に練習できたらいいんだけどね。どうしたらいいのかな？」と投げかけることにし様子を見守っていくことにした。この日はB児を追いかける子はず、またB児も自分からグループに戻ることは無かった。その後B児以外のメンバーで大縄の練習をし、この日の練習を終えた。

考察

A児が自分の思いを素直に主張していたことから、グループのメンバーに対して少しずつ慣れてきた様子であった。しかし、言い方が荒々しく感じられ、自分の意見だけを押し通そうとしているように感じられた。その勢いで自分の思いが通ることもこれまで多かったが、今回は他のメンバーに言い返されて悔しくもあり泣いていたと考える。また、教師の話しを頷きながら聞いていたことから、思いを代弁してもらいながら気持ちを整理しているようだった。

B児はグループの名前を決める時や、大縄で練習するときに自分の意見が通らないとすぐに不機嫌になりそっぽを向いたり、その場から離れるなどの自分本位な行動がみられる。

しかし、教師の声かけに素直に応じ、一人一人に「ばらでいい？」と確認していたことから、皆と一緒にやりたい気持ちはあるのだと感じた。意見が通らない時に怒るのではなく、皆と相談していく過程を経験させてあげることや、時には教師が見本となって示していくこともB児には必要だと感じた。

12月12日(検証場面③)

相手のことを考えてみる

(背景) 明日、明後日は次年度の新入園児が来園する予定のため、これまで練習してきたことを披露したり、忍者の修行を優しく教えてあげようという話をした。そして、グループごとに練習をしたり、各グループの課題への声かけや援助をした。

クラス全体 お客さんを迎えて、グループの技を披露するという見せたい気持ちが高まっていた。自分

だけのことで無く、相手を思いやる場面や、お互いの直してほしい点を伝えたり、言われたことに対してすぐに怒るのではなく、素直に受け入れる場面も見られるようになってきている。

サンタグループ練習後、A児は他のグループの泣いているSさんを見つけた。そのSさんの周りには数人の子が取り囲んでおりこの状況に困ったような顔をしていた。それを見てA児はすぐかけより「話を聞いてあげよう！」と周りの子に言っていた。A児は泣いているSさんに「なんで泣いているの？」と優しく話しかけてくれ、Sさんは泣いていて答えはしないものの、A児の顔を見ながら質問に対してうん、うんと頷きながら泣くのをやめようとしているようだった。

ばらグループこの日のメンバーの様子として、出番の時は一生懸命に楽しく演技しているが、友達の頑張っているときに壁にもたれたり、おしゃべりしている様子が目立った。そこで教師は、ばらグループを集めることにした。

教師：「皆は応援されたらどんな気持ちかな？」

グループ：「うれしい。」

教師：「壁にもたれたり、おしゃべりしているけれどどうして？」

グループ：（顔を見合わせている）

教師：「お客さんにも披露したいんだよね？グループの皆に一生懸命応援してもらえたらお客さんの前でも力が出そうじゃない？」

グループ：「うん...」

教師：「B児は壁にもたれているけれど、それもお客さんは見ているよ。どんな忍者になりたいかな？どんな応援の仕方がいいのか？グループの皆で考えてみてね。」

《グループの会話》

（しばらくは沈黙があり、練習の態度の話から、いつの間にか縄跳びを跳ぶ順番を決めることになった。飛ぶ順番が決まった後に、教師の声かけにより、再び練習の時の態度について話になった。）

Rさん：「練習の時の話... B児さ、練習の時にはさ、壁にもたれないでね。いい？わかった？」

B児：「うん。」

他のメンバーも頷き、全員納得した表情だった。

考察

A児は先日、自分が泣いている所に皆が集まってきた状況の中で、教師や周りの友達に自分の思いを聞いてもらった経験から、今回似たような状況にあるSさんのことを、助けてあげたいと思う気持ちになり、行動したのだと考える。

B児は最後まで話し合いに参加していたことから、グループの一員であるという気持ちが育ってきていると考える。最後はRさんの言葉でB児を含む他のメンバーも納得し、お客さんに披露する時の態度について考えるきっかけとなった。B児はこれまで、思い通りにならなかったり指摘されるとすぐに怒ったり、すねたりすることが多かったがこの日は友達の声に耳を傾け、指摘されたことに対して自分をふり返り素直に納得していた。

12月14日（検証保育④）

新入園児を迎えよう！受付係か案内係か

（背景）これまでグループで取り組んできたことを、体験入園に来てくれた子ども達に披露してみることを提案し、その中でさらにグループとしての仲間意識が強まったり、友達と一緒に見せる楽しさや応援する気持ちをもてるようになってほしいと願い、子ども達と取り組むことにした。

クラス全体新入園児を迎える為に何が必要か投げかけてみると、受付係と案内係が必要ではないかという意見がでた。教師はグループごとに係を決めてみよう提案し、グループでどちらの係をやってみるか話し合ってもらったことにした。

サンタグループ A児は「Uさんは何がいい？受付？案内係？」と中心となって積極的にメンバーに質問していた。意見が異なったため「じゃあ、ジャンケンで決めよう！」と提案し、ジャンケンが始まった。しかし、すぐには決まらず、後出しだったとメンバーは言い合いになっていた。その様子を見ていた、ばらグループのB児は、「めぐみ先生に聞いたら？」と割って入ってきた。A児は考えていたが、教師の所に来ることはなく、再びグループのメンバーに「もう1回ジャンケンしよう！」と提案していた。どのグループよりも時間はかかったが、何とか自分達だけで案内係と決めることができていた。

ばらグループ B児は「受付係」、他のメンバーは「案内係」を希望しており、両者譲らず言い合いになっていた。それがしばらく続き、B児が「そんな風に言うんじゃないよ！うるさい！」と少し怒った口調になった。Kさんは「受付係はチケット配るだけだから嫌だ。案内係はお客さん案内するよ？」と説得していた。しばらく沈黙があり、B児は「なんか案内係楽しそう！」と皆に意見を伝えていた。それを聞いたRさんがB児に「じゃあ、案内係ね。」ともう一度確認した。ばらグループは皆揃って手を挙げ、「先生、決まったよー！」と元気に声をかけてくれた。

教師はかけより「皆で一つの意見に決めることができすごいね。B児も皆と一緒にお話出来たんだね。すごいね！」と声をかけた。教師とばらグループは一緒になって「頑張るぞ！えいえいおー！」と気合いを入れた。



図5 外で呼びかける案内係

考察

A児は少しずつグループの中心となって、積極的に働き掛けるようになってきている。また隣のグループのB児が入って来たときは、すぐに教師に助けを求めるのではなく、自分達で解決しようとする気持ちがみられる。グループの友達と何度も向き合う中で、案内係に決めることができ、自信に繋がっていると考える。

B児と他のメンバーの意見が違っていたため、どちらも譲らずなかなか話しが前に進まなかった。B児は初め意見が通らず少し怒った様子であったが、他のメンバーに何度か説得されるうちに、少しずつ気持ちに変化が現れてきたと考える。自分の気持ちに折り合いもつけながら、他のメンバーの気持ちも考え、譲ってあげる気持ちも持てるようになってきていると考える。また、グループの意見が一つになることで、楽しく活動がスタートできるのだと実感する機会となったと捉える。

12月18日（検証保育⑤）

みんなで忍者の絵を描こう

（背景）絵本「わんぱくだんのにんじゃごっこ」を読み聞かせした後、みんなが思い描く忍者さんってどんな姿をしているかな？」と投げかけ、イメージを膨らませるようにする。

今回はグループで協力しながら大きな黒い紙にクレヨンを使って描くように設定した。グループで忍者のイメージを言葉で伝え合いながら共有できるようにする。どこから描きだすか役割分担をしたり、どこを何色に塗るのか、手裏剣や剣はどんな風に描くのかななどの意見を出し合いながら進めていくようにする。



図6 絵本『わんぱくだんの
にんじゃごっこ』

作：ゆきのゆみこ・上野良志 絵：末崎茂

サンタグループ

皆：「どんなふうにかく？」
A児：「あっ、めぐみ先生みたいな忍者いいんじゃない？」
（教師が見本として描いていた忍者を指で指しながら）
皆はその意見に賛成し、忍者の顔からまず描くことにする。
Cさん：「これほっぺたさ」
皆：「おにぎりみたーい！」
皆顔を見合わせながら楽しそうに笑っている。
A児：「よーし、体はむらさき色でぬろう！」
Yさん：「じゃあ、みどりで！」
Uさん：「カラフル忍者だー！」
皆で楽しそうに描いていた。

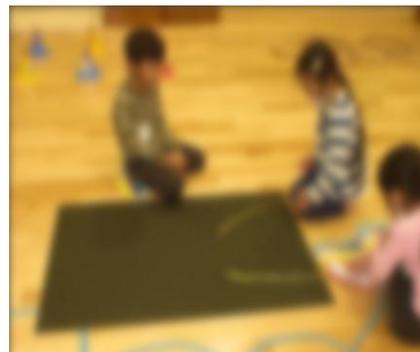


図7 グループで描いている様子

ばらグループ

Eさん：「真ん中に星かこうよ。」
B児は一生懸命色を塗り続けている。
Rさん：「そんなに塗っちゃだめだよー。」
B児はそのまま塗っている。
Rさん：「まあ...いいか。体のここからここまでは、黄色。
ここからここまではむらさきにしたら？」
B児：「いいよ。」
皆で分担して色を分けて塗っていた。
少しずつ描かれていく自分達の忍者の絵に満足そうにしていた。



図8 グループで描いた忍者の絵

考察

サンタグループは、意見が活発に出ており、皆で積極的に描いていた。グループ活動が始まった頃と比べると、些細なことでトラブルになることが減りつつある。A児も、友達に対しての言い方が優しくなってきた。相手の気持ちを考えながら発言できるようになってきた。

B児は都合の悪いことは聞こえてないふりをすることもあるが、以前に比べると友達に指摘されたからといってすぐにその場から離れて行くことは減っている。友達と一緒にグループとしての意見をまとめていくことで、活動が楽しく進んでいくことを実感してきたからだと考える。

グループで描くということは、自分の思いやイメージを共有する必要性がでてくる。絵を他者と協力して描くということは、相手に思いを伝えること、また気持ちに折り合いをつける機会となると考える。

12月19日（検証保育⑥）

忍者ショーをしよう

（背景）これまでグループで忍者ショーに向けて取り組んできた。グループでの取り組みを進める中で、少しずつではあるが、子ども達同士で考えようとする姿がみられるようになってきている。また手作りの衣装、ポスター、忍者の壁面などの必要なものをつくる中でさらに意欲的になってきたと考える。子ども達と相談し、本時は教師が通っている忍者学校（研究所）の先生方も来園することや、他のクラスの園児もお客さんとして呼ぶことになっている。

クラス全体朝から、「どきどきしてきた〜！」「先生、衣装つけ

ていい？」と興奮していた。時間になると受付係か案内係にグループごとに相談して別れ、お客さんを迎える準備を始めることにした。宣伝する為に園庭にでて大きな声で呼びかけたり、チケットを配ったりとグループで協力していた。

忍者ショーが始まると、お客さんの前で楽しみながら技やダンスを披露し、「〇〇頑張れー！」と大きな声で応援したり、縄跳びの飛んだ数を数えたり、拍手をしたりと盛り上がっていた。



図9 衣装づくりの様子

また、グループで使う道具の出し入れは自分達でできるところは協力してやろうとしていた。

サンタグループ サンタグループは行動が機敏で、演技中の道具の準備や片付けを協力し合いながら行っていた。A児がやりたくて泣いていた、こまの演技は、A児がこまを板の上で回し、その板をグループの友達と一緒に持ち上げるようになっていた。当日の朝まで練習していた技が、友達と力を合わせて決まり、とても嬉しそうにしていた。演技が終わり、A児が「もっと技見せたい！」と教師に相談してきた。教師は、また皆の前で披露できる日が持てるように一緒に考えていくことを約束した。



図 10 忍者ショーの様子

A児はやる気に満ちあふれているように感じられた。最後の感想ではA児が手を挙げ「Uさんがホッピングを頑張っていました」とグループの友達の良いところを見つけ、皆の前で発表していた。

ばらグループ 当日はお友達のことも応援してあげる姿が多くみられ、「〇〇頑張れ！〇〇頑張れ！」と大きな声で励ましていた。ホッピングでは、一人ではまだ飛べなくても、グループの友達や教師に補助してもらいながら一生懸命飛んでいた。

また、B児は練習の時に大縄がなかなか続かなかった。当日は3回、4回と失敗していたが諦めることが無く、最後は初めて20回以上飛ぶことができた。演技が終わってから、「先生、こんなに飛べると思わなかった！」と声をかけてくれた。教師が「見ていたよ」と返すと、嬉しそうに笑った。

考察

A児の最後の感想では、自分のことではなく、グループの友達の頑張りを発表していた。自分のやりたい技を皆に受け入れてもらい、そして協力してくれたグループのメンバーに対して少しずつ気持ちの変化があり、友達の良いところにも目を向けるようになってきたと考える。また「もっと技見せたい！」と意欲的で、見せる楽しさを感じていた。

B児はこれまで自分本位な発言や行動が多かったが、友達に応援してもらった経験や協力するからこそ技ができた経験が、自分も同じように応援してあげたいという気持ちに繋がっている。

大縄では失敗が続いたが諦めなかったことで、最終的に最高記録が出せた。そのことに自分でも驚き、演技が終わってもまだ興奮冷めやらない様子であり、大きな自信と成長に繋がっていた。

12月21日(検証保育⑦)

忍者ショーを終えて

(背景) 忍者ショー後も引き続き、遊びが深まっていくように園の職員の協力も得ながら取り組むようにした。忍者に必要な剣などの小道具が思い思いに作れるように教室の製作コーナーを整えたり、材料を準備し、忍者ショーで使った衣装をすぐに手に取れるようにした。またクリスマス会や生活発表会ではいきいきと演技する姿が見られた。

クラス全体 検証保育直後から、忍者ショーで使用した衣装はいつでも着られるようにハンガーに掛けて、教室におくことになった。すぐに忍者の衣装を着て忍者ごっこをする子や忍者の剣を作り始める子もいて、そのイメージが広がっていった。



図 11 材料や道具の準備

後日クリスマス会で、クラス全員で「忍者のおにぎり」のダンスを披露することになり、当日は体を大きく動かしながら笑顔で披露していた。

また2月2日に行なわれた生活発表会では、これまでやってきた忍者の技にさらに物語やわらべ歌なども子ども達と相談しながら取り入れており、忍者になりきって生き生きと披露し自信になっていた。

抽出児A生活発表会に向けて話をした時にも「忍者をやりたい！」と率先して意見を伝えていた。

また他の友達の「劇をやりたい」「歌を歌いたい」という意見にも耳を傾けていた。当日はペアの友達と顔を見合わせながら互いに合図を送り演技をしていた。

抽出児BB児はお友達と忍者ごっこをしたり剣を作ったりして遊ぶようになった。これまで自分から友達を誘うことがほとんどなかったB児が「やろう！」と意欲的になっている。またすぐに怒ったり、すねたりすることが徐々に減っている。誕生会で披露した人形劇では、グループのリーダーを自ら務め、自分なりに声を大きく出しながら楽しんでた。生活発表会では表情豊かに演技しており、友達と一緒に楽しむ姿が見られた。



図 12 生活発表会

考察

クラス全体としては、忍者ショー後も遊びの中にそのイメージを取り入れながら楽しんでた。グループやクラス全員で活動することに楽しさを感じるようになってきたことが、生活発表会の生き生きとした演技に繋がったと考える。

A児は生活発表会に向けても率先して「忍者をやりたい！」と希望していることから忍者ショーの経験がとても楽しく、自信になっていると考える。また意見を出し合う場面において、自分だけの意見を押し通そうとすることが減り、相手の意見にも耳を傾けようとしている。友達に目で合図を送る姿から相手のことを意識し、合わせようとしている思いやりの行動だと考える。

B児は、これまでは自分から友達を遊びに誘うことがほとんど無かったが、自分から友達と関わりたいと思うようになってきたと考える。遊ぶ中でも、以前のようにすぐに怒ったり、すねたりすることが減っているのは、ばらグループで相談していく過程を経験したことが大きいと捉える。また、自ら人形劇のリーダーを務めていることから、友達と一緒に人前で披露することに楽しさと、自信を持ってきており、それが生活発表会へ繋がっていると考える。

2 検証のまとめ

(1) クラス全体・A児・B児の変容

本研究では、幼児の思いやりの気持ちを育むために、教師が意図したグループ編成の工夫をする中で、忍者ショーに向けた活動に取り組んできた。グループ活動では、グループの名前決めから始まり、技決め、技をする順番決め、係決めなど様々な場面でグループで相談していく機会を意図的につくっていった。初めは、共通の目的に向かった話し合いがなかなかできず、話が逸れてしまったり、メンバーが居なくなったり、言い合いになったり、会話が止まってしまう場面が多く見られた。教師はその際、グループの力に任せ見守った方が良いのか、すぐに声をかけた方が良いのか考えながら援助していくようにした。そのため、グループによっては1日では決めることができなかったこともあり、次の日まで話し合いが持ち越されることもあった。このようにして、できるだけ子ども達の力で何度も話し合いを重ねることにより、次第に相手のことも意識したり、考えるようになっていった。例えばメンバーに「〇〇がいい！」という言い方ではなく、「〇〇にしてもいい？」というように伺いをたてる発言が増えていた。また、話し合いの中で意見が重なりなかなか決まらないときに、「じゃあ〇〇にしてもいいよ。」と自分の気持ちに折り合いをつけて譲ってあげたり、多数決をとる場面も増えていた。また練習の中で、お友達に手を貸してあげたり、応援したりする姿も見られることから自分だけのことではなく、相手を思いやる気持ちが芽生えていると捉える。

自己主張の強いA児は、こまを技として見せたいという場面において、自分の意見を一方的に伝えるだけであり、言い方も荒々しかった。普段なら周りがある意見に押し切られるようなところもあったが、A児と同じように自己主張の強いメンバーの中で、葛藤やつまずきも経験していた。その経験を積み重ねることにより、友達に対して、優しく話を聞いてあげようとする行動が見られたり、「〇〇はどう思う？」というように相手に伺いをたてる発言が増えていった。これは、自分だけのことではなく相手の

ことも考えた思いやりの気持ちが育まれていると考えられる。

B児は、検証前は遊びや活動への興味関心が低く、少しずつ友達と関わろうとするようになってきたところであった。他者との関わり方も自己中心的で些細なことで怒ったり、すねたりしていた。グループの名前を決める場面では、初めは一方的な意見であったが、教師の指摘を素直に受け入れていた。友達に自分の意見にして良いのか確認する経験、友達を応援し、また自らも応援される経験、練習態度についてグループで考える経験などを積み重ねてきた。変容として、受付係か案内係かを決める場面で、B児は自分の気持ちに折り合いをつけ他児の意見に賛成している。普段なら譲ることが見られなかったB児が、なかなか決まらないグループのために、相手の意見を尊重していた。このことからB児は葛藤やつまずき、そして何より友達と一緒に活動することの楽しさを経験し、思いやりの心が芽生えていると考える。

(2) 保育者の工夫と振り返り

忍者ショーに向かうグループ活動に入る前に、一人一人が思いきり体を動かしながら忍者の修行(運動遊び)を楽しむ期間があった。そのことにより一人一人の興味関心の高まりからグループ活動へ移行しやすくなった。またホールにはいつでも忍者の修行ができるようにマットや平均台等の環境をそのままにした。計画的に見通しをもちながら進めることで子ども達の活動意欲に繋がったと考える。

グループの人間関係の中でどの場面で思いやりが育つようにしていくのか、グループの課題をどう設定していくのか、どこを見守り、援助していくのかなど計画性をもって取り組むことで、グループ活動の中で子ども同士の育ちがみられたと考える。

グループは現在の仲間関係を考慮しながら編成し、グループ活動を取り入れる時期、人数、男女の偏りなどを考えてきた。今回グループ活動を取り入れてみて、学級によってグループ活動を取り入れる時期は必ずしも同じ時期ではないこと、また仲よしのグループにするのか、あえて関わりが少ない子ども達を出会わせるのか、やりたい活動が同じ子ども達のグループで編成するのかなど、その編成によって子ども達の育ちは違うものになると考える。人数も4人程度がお互いを意識しやすいと考えるが、その人数は時期や実態によっても変わってくるだろう。今回は26人を6グループで編成したが一斉活動での各グループの変容、課題の読み取りに苦労した。グループごとに関われる工夫や一斉活動だけに限らず1日の中で柔軟に関わっていくことが必要だと考える。教師の意図したグループ編成、グループ活動は子ども同士の関わりを深めるとも重要な手法の一つだと考える。

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 教師の意図したグループ編成の中で、話し合う経験、共通の目的に向かって取り組んでいく経験を重ね、葛藤やつまずきを経験し相手のことも考える思いやりの気持ちが育ってきた。
- (2) グループやクラス全体で活動することの楽しさを感じ、興味関心の高まりや人前で披露することに自信が出てきた。

2 今後の課題

- (1) 複数あるグループの日々の様子、課題を読み取っていくことが難しかった。一斉活動の中で、また1日を通してどう読み取っていくのか工夫が必要である。
- (2) グループで話し合う機会をどの時期から取り入れ、活動のどの場面で設定していくのかなど園の年間指導計画やクラスの実態を十分に考慮しながら取り入れていく必要がある。
- (3) 話し合う場面において、グループによっては時間がかかることがある為、計画的な見通しをもった時間の確保が必要である。

【参考文献】

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領』、フレーベル館 2017年
- (2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
- (3) 今井和子・森上史朗編著『集団ってなんだろう』ミネルヴァ書房 2007年
- (4) 九州合研常任委員会編『集団づくり』かもがわ出版 2013年
- (5) 辰巳文一著『遊びと造形表現』三晃書房 2000年
- (6) 岩崎洋子編・吉田伊津美・朴淳香・鈴木康宏著『保育と幼児期の運動遊び』萌文書林 2013年
- (7) 神永美津子監修・編著、岩城真佐子編著、協力・執筆山瀬範子『3・4・5歳児のごっこ遊び』ひかりのくに 2017年

